





左保

花散る奥州路

文藝春秋

雪に花散る奥州路

昭和四十六年八月二十日 第一刷

定価 五三〇円

著者 笹沢左保

発行者 桜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

印刷 凸版印刷
製本 大口製本

万一落丁・乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1971 Saho Sasazawa

Printed in Japan

0093-302060-7384

目次

雪に花散る奥州路	3
狂女が唄う信州路	65
木っ端が燃えた上州路	127
峠に哭いた甲州路	193

装帧
栗屋充

雪に花散る奥州路

信玄公の隠し湯として知られた山梨県の下部温泉しもべは、江戸末期のその当時すでに多くの湯治客によって利用されていた。現代と違ってその頃の温泉場は、観光や歓楽のための施設という要素が薄かった。もっと実用的なもので、治療や保養を目的に長逗留をする場所であった。

特に、下部温泉の湯は、外傷に特効がある。いわば、天然病院であった。湯治客の殆どが、怪我人だった。だから、そこには華やかな雰囲気など、まったくなかった。もちろん、外傷に害のある酒を飲む者もない。湯治客は全快を待って、真剣に湯につかったり、室内で身体を横たえたりしている。

甲州下部奥の湯の湯治場は、それ全体が常に静まり返っていた。周囲は、山ばかりである。東には富士の外輪山、北に雨ヶ岳、南に三石山、西には身延の山越しに七面山が見えている。湯治場は富士川へ流れる溪流沿いであって、霧立つ朝や山鳩の声を聞く夕暮れが多かった。人里離れた湯治場の感があり、そこには黙々と治療を続ける怪我人たちの鄙ひなびた生活があった。

それだけに、旅籠屋はたごやといった行き届いた設備がなかった。幾つかの湯は屋根を柱で支えて、簡単な囲いがしてあるだけだった。大きい湯だと、屋根しかなかった。完全な野天風呂もあり、岩の底ひきしを屋根代わりにしている湯もあった。それらを取り巻くようにして、幾棟かの建物が並んでいる。普通の民家と変わりなく、長屋のような建物だった。

そこに湯治客や、怪我人の付き添いたちが雑居している。もちろん相宿で、個室などはなかった。管理人がいて入湯料や滞在費を徴収するし、湯治客の生国しょうこく、在所、名前などを泊り帳付けする。しかし、女中などはいない。走り使いを頼む小女、湯番をする老人がいるだけだった。鍋や米を持ち込んでの自炊であることは、言うまでもない。

そうしたところへ、健康な人間が物見遊山に来るはずはなかった。新たに湯治に来た怪我人のほかに、精々身内の者が見舞いに訪れるくらいであった。下部の湯は、湯治に専念する人間だけの別天地だった。客を迎える必要もなかった。だが、例外はあった。ひとりだけ、何度か客の訪問を受けている男がいたのである。

その男は下部の湯に逗留を始めて、一カ月ほどになる。泊り帳によると上野国伊勢崎在、武吉ということになっている。三十前後で、背の高い男だった。眉毛が濃くて、目鼻立ちのはっきりしたなかなかの男前である。しかし、その色の浅黒い顔には、人を嫌うような暗い翳りかげがあった。いつも無表情で、見るからに陰気である。

この武吉という男は、相宿の湯治客たちから変わり者としての扱いを受けていた。一カ月も同じ屋根の下で寝起きしているのに、武吉という男は誰とも交わろうとしないからだ。いつも、

ひとりだけ離れて行動していた。誰もまだ、この武吉という男の笑った顔を見たことがなかった。武吉のほうから話しかけて来ることは、絶対にない。

質問しても、短く一言だけ答えた。ひとりで湯につかり、ひとりで散歩して、夜は端の蒲団に横になり壁のほうを向いて寝てしまう。武吉は、右手が不自由であった。左手だけで、土鍋を火にかけ粥を作っている。ある怪我人の付き添いの女房が、見かねて手を貸そうとした。しかし、武吉はそれさえも、拒んだのであった。

武吉に馴染む者はいなくなつた。どうも、気味が悪い。笑つたことのないその陰鬱な顔を見ても、何か事情がありそうだった。言葉遣いや態度は、慇懃^{いんしん}すぎるくらいである。だがそれは明らかに、玄人そのものの渡世人特有の言動だった。長脇差を持っているし、のびた月代^{さかやま}も渡世人の鬻^{まけ}であつた。

武吉は、長脇差を手放したことがない。寝ている間もかかえ込んでいるし、湯につかりに行くときも持っている。傷は、右肩にあつた。腕の付け根から、腋の下へ突き抜けている傷だった。もちろん、刀で突き刺した傷である。医師の手当てが終つてから、ここへ湯治に來たもので、すでに肉も盛り上がっている。

武吉は湯につかるとき、左腕に手拭^{てぬぐい}を巻きつけるようにしていた。しかし、湯治場は共同ではいる総湯、または入りこみ湯であつたから、その手拭で隠している左腕に何があるか誰かの目に触れてしまう。そこには二本の入墨があると、いつの間にか湯治客たちに知れ渡っていた。

いわゆる入墨者である。前科のしるしであつた。入墨者の渡世人で、右肩に刀傷を負っている。

当然、無宿人だった。そうになると、堅気の人々には恐ろしい相手であった。善良な湯治客たちは逆に、武吉を敬遠するようになった。だが、敬遠されることに馴れているらしく、武吉はそれまでと変わりなかった。その武吉のところへ一カ月間に、三人も訪問客があったのだ。

三人いずれも、渡世人ふうの男たちであった。しかし、武吉は三度とも、客に会おうとはしなかった。客が来たと知ると、武吉は湯治場から姿を消してしまふのである。近くの山へでも行っているのだろうが、夜になるまで戻って来なかった。その度に、訪れて来た渡世人たちは、さすがと引き揚げて行くのだった。

やがて、そうした渡世人たちが何を目的に来るのか、湯治客たちにもわかったのであった。渡世人たちはいずれも、甲州や信州の貸元の身内であって、下部で湯治する費用を払わせてくれと武吉に頼みに来るのである。それは身体が恢復したら腕を貸して欲しいと、武吉に依頼することを意味していた。武吉は使いの者に会わないことによって、その依頼を拒絶したのであった。

湯治客は、驚いたり畏怖したりであった。武吉がそれほど名の売れている渡世人とは、思っていないからである。それにしても、武吉の用心深さは異常なくらいだった。長脇差を手放さないだけではなく、常に敵を意識している目つきであった。それでいて、さりげなく装っている。湯治客の好奇の目を知ってか知らずか、ただ黙々と傷の治療に専念しているようだった。

四人目の客が下部の湯治場を訪れたのは、嘉永三年三月初旬の朝であった。そのとき、武吉は朝の湯につかっていた。一日の大半を湯の中で過すのだが、朝も明け六ツからすでにつかっていたのである。下部の湯は、体温以下であった。季節もまだ三月の初旬で早朝となると、震えがと

まらないくらい寒いし冷たかった。

しかし、しばらくすると身体の芯から、火照るように温まって来る。だから、長湯をしなければならぬ。長時間湯に傷をつけているのが、特効の因でもあった。湯につかっているのは、武吉だけだった。近づいて来る足音を耳にしたたん、武吉は岩の上の長脇差へ左手をのぼした。

「武吉さん、おいでですかね」

湯番の老人の顔が、囲いの上から覗き込んだ。

「へい……」

武吉は、左手を湯の中へ引っ込めた。

「また、お客人がお見えなんですがね」

老人も困ったというように、顔をしかめて見せた。入浴中の来客となると、いつものように裏山へ逃げるというわけにもいかなかった。

「お手数ですが、いまはいねえと断わっちまっておくんなさい」

武吉は、老人に会釈を送った。

「けれど、今日のお客人は、ずいぶんと遠方から来られたんだそうですよ」

老人は気の毒そうに、後ろを振り返った。

「どんなに遠くから来ようと、あっしの知ったことじゃねえんで……」

武吉は、軽く目を閉じた。

「何でも、野州の越堀宿からとか言ってなすった」

老人は、音を立てて溜め息をついた。同時に、武吉の表情のない顔に微妙な反応が見られた。目は閉じたままだが、唇の端がチラッと動いたのである。

「野州越堀の貸元からの、使いの者なんでござんすかい」

武吉の低い声が、深い天井に響いた。

「越堀の仁五郎親分からの差金で来た、とかいう話で……」

「だったら、ここへ来るように言っておくんなさい」

武吉は、目を開いた。老人がほっとしたように笑って、小走りに去って行った。武吉が初めて、客に会うことを承知した。それが老人には、何となく嬉しかったのだろう。

武吉は急いで湯から上がると、衣服を身につけた。左手に長脇差を提げて、囲いの外へ出る。朝霧が流れていた。その霧の中を四、五人の影が近づいて来た。四人までは湯につかりに来た湯治客だと、その声や姿形でわかった。ひとり離れて歩いて来る渡世人は、初対面の男だった。

その渡世人は武吉に気づくと、弾かれるように駆け寄って来た。渡世人は武吉の前に片膝を突いて、深く頭を下げた。それを見た四人の湯治客が、その場に足をとめた。何事が起るのかといった目つきで、武吉と渡世人のほうを見守っている。武吉も用心深く、若い渡世人に目を注いだ。

若いと言っても、二十七、八である。大柄で、精悍そうな顔つきをした好男子であった。引き回しの道中合羽と、百年も前の三度飛脚が用いた大型の菅笠を脇にかかえていた。いかにも遠方から来たという道中支度で、手甲脚絆も薄汚れている。野州越堀は、現在の栃木県黒磯町の東六キロのところに位置する奥州街道の宿場町で、福島県との県境まで二十キロほどしかなかった。

そこから山梨県の下部まで、当時としてはかなりの距離であった。

「お初に、お目にかかりやす」

若い渡世人は、武吉を振り仰いだ。

「あっしは野州越堀の仁五郎の身内で、橋場の勘助という三下にござんす。親分仁五郎の口上を預かって参りやした」

橋場の勘助と名乗った渡世人は、霧を払いのけるようにして道中合羽と三度笠を地面に置いた。武吉は、黙って突っ立っていた。

「念のために、お尋ね申します。あなたさんは、二本桐の武吉さんにござんすね」

橋場の勘助が声高にそう言うのと、この様子を見守っていた四人の湯治客たちが急に緊張した面持ちになって顔を見合わせた。二本桐の武吉——それは、堅気の衆の間でも噂になったことのある名前だったからである。

2

武吉は勘助を連れて、河原へおりて行った。霧が薄れて、清流が冷たそうに岩を噛んでいた。あと一カ月もすると、岩燕が飛び交う川面であった。勘助は、河原に転がっている岩の陰にしゃがみ込んだ。武吉は、その左側に立った。右側に立てば、いきなり斬りつけられる恐れがある。

それに対する用心であり、武吉にとっては習慣的なことだった。

「仁五郎親分は、お達者でござんしょうね」

武吉は、感情のこもらない目で川の流れを見やった。

「それが半年めえから、すっかり弱気になっちめえまして。このところは、寝たり起きたりの毎日でござんす。持病の喘息が、日に日にひどくなりやして……」

勘助が、暗い表情になった。

「一家も、落ち目というわけですかい」

「へい。身内も、二十人ほどに減っちめえしました。だからこそ、あっしみてえな腰抜けでも、結構頼りにされているんでござんしょうねえ」

「おめえさんは、いつから越堀のお貸元のところの身内に、なりなすったんですかい」

「二年めえの春に草鞋を脱いで、そのままお世話になっておりやす」

「道理で、おめえさんとは初めてののはずだ。あっしがこのめえ越堀に寄ったのは、もう四年もめえのことでござんすからね」

「武吉さんの話は、親分やお嬢さんからよく聞かされました。そのお嬢さんも、いまでは心細さにすっかり驚^やれてしまわれて……」

「お絹さんも、二十四か五になりなすったんじゃねえんですか。それでまだ、嫁入りもしてねえんじゃあ……」

「それどころじゃござんせんよ」

勘助が、武吉を見上げた。責めているような目をしている。勘助もその辺の経緯を、誰からもなく聞かされて知っているらしい。しかし、そのことで武吉が非難される道理はない。この十年間、一つところに落着いたことのない流れ者であり、野良犬のような生き方が身にしみついてゐる武吉だった。

その武吉が野州越堀の仁五郎宅に限って、ちょいちょい草鞋を脱いだのも、特別な理由があったのことはなかった。ただ何となく仁五郎と、ウマが合ったというだけのことにはすぎない。親子ほどの年の差はあったが、武吉は裏表のない仁五郎の性格に好感を持ったのだ。仁五郎が娘の婿に考えようと、当のお絹が思いを寄せようと、武吉には関係のないことだった。

むしろ、そうとわかったからこの四年間、野州越堀へは足を向けようとしなかったのである。武吉にしてみれば、世帯を持つことなど考えも及ばなかった。相手が堅気の女だろうと貸元の娘だろうと、同じことであつた。嫁をもらって、子どもができる。そうなれば、生きることへの執着や未練が生ずる。

渡世人にとって、それは許されないことだった。そんなことは、最初からわかりきっている。特に武吉のような男は、自分の寿命を自分で判断することはできなかった。いつ死ぬか、わからない。いや、必ず殺される。女房や子どもがいるのに、片時も長脇差を手放さずに警戒している。そうしたこと、武吉は大きな矛盾を感じずのだった。渡世人に世帯を持つという現実はあり得ないと、武吉は十年以上も前から割り切っていたのだ。

「親分の口上なんて堅苦しいことはよしにして、あつしにどんな用がおりなのか話しておくん

なさい」

武吉は、抑揚のない声で言った。

「へい。お察しのこととは思いますが、親分が煩って身内も減ったと見たとたん、待っていたとばかり佐久山の竹蔵一家が動き始めたんでござんす。竹蔵は仁五郎以下をみな殺しにして、越堀の縄張りを根こそぎもらい受けるとか言い触らしているようですが、知っての通り佐久山の竹蔵には大前田英五郎の息がかかっておりやす。落ち目になった越堀一家では、もう手も足も出ねえというわけでござんして……」

沈痛な面持ちでそう言って、橋場の勘助は深く項垂れた。

「佐久山の竹蔵が、そうも大した勢いになったんでござんすかねえ」

武吉は、興味ないというように小さく呟いた。

「大変な軍師が、ついちまったんでござんすよ。何年かめえに竹蔵のところに居付いた時次郎という妙に変わった野郎なんですが、こいつが頭は切れるし腕は立つ。この時次郎の働きで、竹蔵は縄張りを広げた上に急に勢いづきやがったんで……」

勘助は口惜しそうに、小石を川面に投げつけた。

「それでも一気に越堀を押し潰そうとしねえのは、どういうわけなんですかい」

「そいつは、武吉さんを恐れているからなんです。うちの親分と武吉さんの仲は、誰もが知っておりやす。下手に越堀を潰しにかかって、武吉さんに不意を衝かれてはと、いまのところは真綿で首を締めするような出方をしているんでござんしょう。そこで是非とも武吉さんの力をお借りして